

フランスにおける文化的背景と映像解釈における考察

A study about between the cultural back ground and the interpretation.

写真映像学科

星野 浩司・中川 千恵子・Michaut Thomas・Marion Frugier

Koshi HOSHINO / Chieko NAKAGAWA

1. はじめに

フランスはEUの中でも最大の国土を持ち、ヨーロッパ屈指の経済大国であり、文学、美術、建築、音楽の領域でヨーロッパ全域に大きな影響を与えてきた。また、世界でも有数の「芸術の都」として古くから世界の芸術・文化の醸成を牽引してきたフランスは多くの芸術家たちが目指す場所でもある。さらに、諸説あるものの、フランスでは芸術を以下の9つに分類する考え方がある。

- 第1芸術 le premier art :
建築 le architecture
- 第2芸術 le deuxième art :
彫刻 la sculpture
- 第3芸術 le troisième art :
絵画 la peinture
- 第4芸術 le quatrième art :
音楽 la musique
- 第5芸術 le cinquième art :
詩 la poésie
- 第6芸術 le sixième art :
演劇・写真 le théâtre・la photographie
- 第7芸術 le septième art :
映画 le cinéma
- 第8芸術 le huitième art :
テレビ la télévision
- 第9芸術 le neuvième art :
漫画 la bande dessinée

特に、1895年にリュミエール兄弟が世界に先駆け、パリのグラン・カフェで実写映画の一般公開を行って以来、フランスでは伝統的に映画関連の芸術祭が行われており、世界中の関係者や観客にとってフランスは憧れの場所でもある。また、パリ12区のベルシー地区にあるCinémathèque

français (シネマテーク・フランセーズ) は世界に先駆けて1930年代より映画情報の集積拠点として、また、映画文化の普及・伝搬を目的に設立され、ヌーベル・バーグの若き監督達に多くの影響を与えたことでも知られている。「Les Cahiers du cinéma (カイユ・デュ・シネマ)」の創刊に参画し、ヌーベル・バーグの精神的父親としても知られるAndré Bazin (アンドレ・バザン) に代表されるように、多くの映画批評家によって、文学および哲学など確立された諸芸術同様、学問的理論の中で「第7の芸術」は古くから国民に愛されてきた。

本研究では、芸術教育の先進地でもあるフランスにて映像表現の新たな試行を模索し、比喩的表現を重視した実験的映像を制作している。この中では、フランス人の作家であるAntoine Marie Jean-Baptiste Roger, comte de Saint-Exupéry (アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ) の作品をモチーフに、主人公の心理描写や現代のフランスが置かれた社会的背景などについて、映像の比喩的表現で物語が進行する映像演出を試行した。これらの表現試行により、第7の芸術でもある「映画」における演出手法の可能性として、我々の経験を介して知覚する類似性に対する映像メタファーの可能性を探るものである。加えて、フランスと日本の被験者に視聴実験を行うことで、両者の芸術教育や文化的背景を基礎とする感性の違いを考察する。

2. フランスにおける伝統的芸術教育

フランスでは、かつて絶対君主制が敷かれたアンシャン・レジーム期 (フランス革命以前のブルボン朝期、16～18世紀) における伝統的メセナ

(文芸庇護)は、王政のプロパガンダへの貢献と引き換えに、芸術家と学者は君主による保護を享受してきた。また、アンシャンレジームに反して勃発したフランス革命が掲げた「自由・平等・同胞愛」は、現在も息づいており、文化政策における教育・文化の機会均等という形で伝統的に受け継がれてきた。さらに、革命期(1790年頃)を境にメセナの伝統は迷走し、当時、芸術創造と知的表現の自由が宣言され、近代になって、いわば「民主的メセナ」としてさまざまな諸制度や施設が設けられた。その象徴ともいえるのがルーブル美術館である。そのような「文化の民主化」を図るフランスの伝統は、現在でもフランス国内の美術館や芸術教育の諸活動に脈々と引き継がれている。

フランスにおける芸術教育は学校教育の早い段階から積極的に行われており、学習指導要領(Programme)では日本の初等教育にあたる段階で、基礎学習期(保育学校年長組～小学校第2学年)と深化学習期(小学校第3～5学年)に分けられ、それぞれの優先課題に芸術教育の時間が設けられている。基礎学習期には最低・最大3時間、深化学習期には最低・最大3時間と科目全体が26時間ある中の10%以上を占めている。ちなみに、文科省が定める日本における図画工作の占める授業時間数は、小学校低学年で6～8%、高学年で5～6%とされており、これらと比較してもフランスにおいて芸術教育が特に重視されていることが分かる。このように初等教育期より積極的な芸術教育を行っているフランスでは映画は娯楽の対象としてだけでなく、教育の手段として古くから愛されてきた。

イギリスやカナダ、アメリカなど英語圏でも映像や映画を取り入れた教育は盛んに行われているが、これらは、いわゆるメディア・リテラシーに関する教育が主である。それらに対し、フランスでは芸術的視点で最も発達した映像媒介として映画を教育に取り入れており、フランス国立映画センター(Centre national du cinéma et de l'image animée : CNC)を中心に小中高において映画鑑賞教育のプログラム等を実践している。さらに、

フランスでは映画批評も早い段階から生まれ、シネ・クラブ運動、「Les Cahiers du cinéma(カイユ・デュ・シネマ)」など、若年層を中心に映画についての本格的な論考が書かれるなど、映画そのものを考察対象とするフランス独自の文化芸術活動が盛んに行われてきた。このように映画を特権化し、映像教育における教育教材として独自に取り入れ、映画そのものを考察の対象とするフランスの教育のあり方は諸外国とは似て非なるものである。

これらの文化的背景や伝統的思考を手掛かりに、本研究の実践と検証考察を行なう。

3. 研究手法

本研究では、独自に作成した映像素材を用いてフランス人と日本人の被験者に視聴実験を行い、それぞれ両国の被験者においてどのような感性傾向があるのか、その差異を評価分析するものである。特に、文芸作品からのテキスト情報を引用し、そのシーンにおける比喩的表現を別々のカットごとに内包させ、映像メタファー解釈の手掛かりとする。

〈実験映像の素材〉

フランスと日本の両国における感性傾向の差異によってフランスが独自に育んできた映像教育における考察の特性を計るため、実験映像のベースは両国に馴染みの深い文芸作品を主題とした。

・基盤とする作家

：アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ

(Antoine Marie Jean-Baptiste Roger, comte de Saint-Exupéry)

・引用する著作

：Terre des Hommes (人間の土地 1939)

：Pilot de Guerre (戦う操縦士 1942)

：Le Petit Prince (星の王子さま 1943年)

著作中の印象的フレーズを用いて比喩的映像表現に置き換える。

1) バラバラになった各シーン素材映像：

3～4シーン

2) ストーリーラインに沿ってつなげた完成映像
それぞれバラバラになった各シーンの素材映像

に対する主観的な考察を調査する。また、それらが文脈に関係なくつながった際の印象について意見の変化を分析する。

最終的な作者の意図をストーリーラインにそった完成映像で視聴者がどのように考察するのかを分析し、段階を追うことで、視聴者の映像リテラシーの変化を分析し、作者の意図を考察する能力について解析する。

〈実験手法〉

- ・フランス、日本、両国間の被験者に視聴を促し、その後、映像における幾つかの質問を行う
- ・質問は筆記形式にて5段階選択式のものや自由記載形式のアンケート調査を実施する

〈被験者〉

- ・20代～30代のフランス人、日本人の男女

〈実験詳細〉

1) 3～4シーン（各1分弱：合計5分弱）の映像視聴+アンケート記入（15分）

2) ストーリーに沿った映像視聴+アンケート記入
〈実験時間〉

視聴時間10分+アンケート記入時間25分程度
（合計）約35分

〈評価方法〉

- ・それぞれ両国の被験者から取得した調査データを比較分析する
- ・選択式評価では印象分析の比較分析を行う
- ・自由記載では、記載内容に含まれるキーワードを抽出し、抽出したキーワードを基礎とした統計分析を行う

〈考察〉

- ・調査分析結果から、両国を比較した際の、それぞれの特徴分析を行う
- ・両国の差異が生じた背景について、文化的、教育的、歴史的観点から考察を行う
- ・考察を根拠に今後の日本における映像教育において不足している点や評価すべき点を検討する

4. 実験映像の詳細

本研究では、検証実験に用いる映像を新たに制作している。映像の主要な場面でアントワーヌ・

ド・サン＝テグジュペリの著した小説内におけるテキストを引用し、各シーンで主人公の心情や社会的背景を語り、映像メタファーによる隠喩表現における思考の切っ掛けを模索している。

1) 引用テキストの事例

「石」が多く石材を要約するように、「人間」は多くの人間の要約であると信じてしまっていた。大聖堂と石材の総和を混同してしまい、その結果、少しずつ、遺産は消え失せてしまっていた。「人間」を再興しなければならない。「人間」こそ私たちの文化の本質だ。私たちの共同体の要石だ。私の勝利の原理だ。

J'ai cru que l'Homme résumait les hommes, comme la Pierre résume les pierres. J'ai confondu cathédrale et somme de pierres et, peu à peu, l'héritage s'est évanoui. Il faut restaurer l'Homme. C'est lui l'essence de ma culture. C'est lui la clef de ma Communauté. C'est lui le principe de ma victoire.

〈Antoine de Saint-Exupéry "Pilot de Guerre" 1942〉

—キツネは言いました。

「これがおいらの秘密だよ。とても単純なんだ。心でなくちゃ見えないものがあるんだよ。大事なものは目では見えないんだ」

「大事なものは目では見えない」

小さな王子さまは、忘れてしまわないように繰り返ししました。

「君がバラのために費やした時間だけ、君のバラは大切になるんだよ」

「僕がバラのために費やした時間だけ…」

小さな王子さまは、忘れてしまわないように繰り返ししました。

「人間たちはこのことを忘れてしまったんだ。でも君は忘れちゃいけないよ。君は自分が飼いならしたものに対して、いつだって責任を負わなくちゃいけないんだ。君は、君のバラに責任を負っているんだ…」

キツネは言いました。

「僕は、僕のバラに責任を負っている…」
小さな王子さまは忘れてしまわないように繰り返しました。

—Adieu, dit le renard. Voici mon secret. Il est très simple : on ne voit bien qu'avec le cœur. L'essentiel est invisible pour les yeux.
—L'essentiel est invisible pour les yeux, répéta le petit prince, afin de se souvenir.
—C'est le temps que tu as perdu pour ta rose qui fait ta rose si importante. —C'est le temps que j'ai perdu pour ma rose... fit le petit prince, afin de se souvenir. —Les hommes ont oublié cette vérité, dit le renard. Mais tu ne dois pas l'oublier. Tu deviens responsable pour toujours de ce que tu as apprivoisé. Tu es responsable de ta rose...
—Je suis responsable de ma rose... répéta le petit prince, afin de se souvenir.

〈Antoine de Saint-Exupéry “Le petit prince” 1943〉

—「僕は一輪の花を持っていて、毎日水やりをしていたよ。毎週すす払いをしていた火山を3つ持っている。死火山だって同じようにすす払いをしていたんだ。噴火しないなんて言い切れないからね。僕が火山や花を所有していたことで、それらの役に立っていたんだよ。でも、あなたは星の役には立っていないようだね…」
—Moi, dit-il encore, je possède une fleur que j'arrose tous les jours. Je possède trois volcans que je ramone toutes les semaines. Car je ramone aussi celui qui est éteint. On ne sait jamais. C'est utile à mes volcans, et c'est utile à ma fleur, que je les possède. Mais tu n'es pas utile aux étoiles...

〈Antoine de Saint-Exupéry “Le petit prince” 1943〉

—どんなにささやかな役割であっても構わない。

私たちは自分の役割を自覚して初めて幸せになれる。その時、はじめて、心穏やかに生き、心穏やかに死ぬことが出来る。人生に意味を与えるものは、死に意味を与えるものである。

Quand nous prendrons conscience de notre rôle, même le plus effacé, alors seulement nous serons heureux.

Alors seulement nous pourrions vivre en paix et mourir en paix, car ce qui donne un sens à la vie donne un sens à la mort.



図1 連動する時間と水の流れが遮断されているシーン



図2 永遠を象徴する石と何者でもない自らの存在を連想するシーン



図3 定められた人生とその末路に不安を感じるシーン

〈Antoine de Saint-Exupéry “TERRE DES HOMMES” 1939〉

2) 映像メタファーの事例 (図1、図2、図3)

さらに、今回の映像において、フランスが歴史的に恒久の念を込めてきた水や石を対象に主人公の人生における永遠や社会に根強く形成されている階級社会のメタファーとして表現している。

5. まとめ

本実験において、フランス人の20代～30代の男女に対し視聴実験後、アンケート調査を行っており、これから日本人被験者に対する実験を行う予定である。現在、アンケートの集計を行っている段階ではあるが、被験者の多くは映像の比喩的表現として用いた映像メタファーを正しく解釈し、個人の明確な考えや意見を述べていることが分析される。現段階におけるフランス人被験者の傾向分析からも、戦前のシネフィルたちが哲学的な素養を総動員して擁護してきた映画に対するフランスの文化伝統を再認識させられる。また、今後はフランスが古くから取り組んできた映画記号論の成果と共に本研究を遂行する予定である。

「参考文献」

1. Mr. Frederique Leseur. Adjointe au chef du service des activités éducatives et culturelles, Direction des publics
2. Ms. Nadine Combert. Centre Pompidou, éducatives et culturelles, Direction des publics
3. 西野嘉章：博物館学—フランスの文化と戦略、pp.61-78、東京大学出版（1995）
4. Agnes Marconnet. Chef de l'unité médiathèque Service accueil, information, et documentation, Direction des publics
5. 二宮皓：世界の学校、pp.44-47、学事出版株式会社（2006）
6. Centre de Recherche pour l'Étude et l'Observation des Conditions de Vie “La diffusion des technologies de l'information dans la société française”（2007）pp.47-63
8. La documentation française “Statistiques de la culture chiffres clés 2007” pp.53-60 22
9. Musée Du Louvre “Rapport D'Activité 2006” pp.143-144
10. 出口丈人：映画映像史、pp.12-24、小学館（2009）
11. ベラ・バラージュ：映画の理論、pp.164-193、学芸書林（2003）
12. アンドレ・バザン：映画とは何か、pp.216-307、岩波文庫（2015）

